

平成 30 年度採択 チーム AKUAH

PROJECT TITLE

## Chikasui プロジェクト



### PROJECT MEMBER

仲間 綺 (左) 宮崎秋穂 (イラスト担当)

古堅 はるか (中央)

伊藤 恩希 (右)

法文学部・総合社会システム学科 政治国際関係専攻 2 年次 (採択当時)

## プロジェクト内容

### 現状分析

- 八重瀬町での地下水汚染
- 住民の地下水に対する関心の薄れ
- 地下水に関する学び場の不足



### 課題解決に向けて

- ヒアリング調査
- 絵本作成
- 読み聞かせ活動

### STORY

## 地域問題を絵本で伝える まずは子どもに、そして大人に

チーム AKUAH のメンバーは、全員が法文学部社会システム学科の政治国際関係専攻の 2 年生 (採択当時)。八重瀬町が抱える地下水の汚染問題について考えるようになったきっかけとなったのは、今回サポート教員を務めた久保慶明先生が関わる「水の環プロジェクト」の勉強会に参加したこと。そこで八重瀬町の野積みや畜産廃棄物の不法投棄、また生活排水により地下水が汚染されている事を知り、自分たちが出来ることは何だろうと考えた。そして、水循環に関する地域の課題を解決に導く仕組みづくりを支援する「水の環プロジェクト」の発展型として、ヒアリング調査をもとに絵本を作り、読み聞かせを行うことになった。

絵本は子どもが読むだけでなく、親が子に読んで聞かせたり、学校の先生と一緒に読むことも多い。幅広い世代に優しく自然な形で思いを届けるために、最適なツールであると考えられた。絵本を通して、地下水に関心を持ち住民自身が今後の地下水について考えてくれるよう働きかけたいとチーム AKUAH のメンバーはプロジェクトは始動した。

## 聞き取り調査で知った 住民の湧き水にまつわる思い出

八重瀬町の住民への聞き取り調査は、八重瀬町議会議員（現議長）の金城秀雄さん、民謡研究所師範桃原清徳先生、湧き水ファンクラブ、八重瀬町ガイドの会の他、地域の祭事にも参加し沢山の方に水にまつわる思い出を伺った。地域の方々は「なかなか話す機会もないから」と楽しそうに色々教えてくれた。

かつて、湧き水の出る場所には自然と人が集まり、憩いの場になっていた。人々は食材を洗い、洗濯をし、馬を水浴びさせ、子どもは泳いで遊び、そしてお風呂にと水場を使い分けて活用していた。絵本の中では、聞き取り調査をもとに運動会のゼッケンの色や番号まで忠実に再現している。

しかし最初から上手く話が聞けていた訳ではない。初めは「こうしたい」という思いが強く、地域の方と想いの距離があった。しかし何度も足を運んで相手の気持ちに寄り添うように接して行くうちに、上手くまわりはじめた。聞き取り調査の手応えを感じ始めたのはお祭りに参加した頃だった。



## 私達の想いを伝えるために 次の世代へも残せるように

絵本の作成で苦労したのは伝え方。現状のゴミ問題や地下水の汚染問題などをありのままに伝えるのか、昔のきれいな思い出として伝えるのか。伊藤さんは前者を主張したが、サポート教員の遠藤先生から現状の問題を突きつけることで、そこで暮らし働く人々を傷つけるのではないかの指摘もあり、後者でいくことになった。絵本の最後には地図があり、湧き水の場所が記されている。この絵本を読んで興味を持った人が湧き水を訪れることで、今とのギャップにや自分たちの「守りたい」という想いに気づいてほしいという願いが込められた。

限られた予算の中で、長く残せるものをと完成度を高めてハードカバーのものを 20 冊限定で印刷し、簡易の冊子を 200 冊印刷。ハードカバーは図書館や児童館、学校などに、冊子は琉球大学未来共創フェアでブースに来てくれた方に配布した。絵本には小さなワクワクを沢山仕込んでおり、学校や児童館では読み聞かせを行った際に子どもたちは「龍神様だ!」「目がハートだ!」など、気づいたことをどんどん言葉にしながら興味深く聞いていた。2019 年 3 月 23 日に開催された琉球大学未来共創フェアでは、大スクリーンを使い読み聞かせを実施。多くの人がブースを訪れて聞いていた。



## プロジェクトを通じて見えたもの



古堅「私はリーダーでしたが、周りがすごい人ばかりであれやる?これやる?と、どんどん気づいて動いてくれたので、自分が周りを引っ張っていくというよりは場を和ませたりする役割が多かったかなと思います。私はどちらかというと、コミュニケーションを取る事は苦手ではなく、むしろ好きでしたが、こういう風にプロジェクトを通して幅広い年齢層の方と接するのは初めての経験でした。この活動の中で相手の心に寄り添って話を聞く力を培うことができたかなと強く思います」



**伊藤**「私は主にストーリーのアイデアを出すことを頑張りました。その中で、ゴミが落ちているならゴミも描いたほうが良いと主張しましたが、誰かを傷つけるのではなく、大切にしたいという共通の想いに焦点を当てることで、もっと多くの人に広がりを持って伝えられることに気づきました。堅い頭でしか考えていなかったところを、他の視点を知ることが出来たので成長出来たなと思います」



**仲間**「私は南城市出身です。南城市には垣花樋川があって、祖母からそのお水の話や、水道のこと、洗濯していた場所のこと、行事の際に水を汲んでいた話など沢山聞いていました。授業で地下水の事を学んだ時に、もっと地域の人から話を聞きたいと思ったのは祖母の話を聞いていたからなのかなと思います。でもこの様な話は口で伝えられるだけなので、直接聞ける範囲の人から聞くことしか出来ない。だからこうやって絵本という形に残したことはとても意義があることだと思いました」



宮崎「私は普段から絵を描くことが好きで、今回のプロジェクトでは絵本のイラストを担当しました。八重瀬町の皆さんにただ読んでもらうだけでなく親しみがわくような絵本を作るため、やさしく柔らかい絵のタッチにしたり、聞き取り調査を元に当時の湧き水や八重瀬町の人達の様子をできるだけ忠実に描きました。龍神様やネコの表情など、気づいた時に「あ！」となるような工夫を随所に散りばめました。自分のスキルを自分のためだけでなくチーム AKUAH のため、八重瀬町のため、そして人のために活かす素晴らしさに気づけたことが一番の成長だと思います」

## 成 果

- 絵本を通して地下水保全に対する住民の関心を高めることが出来た。
- 子どもだけに留まらず、世代を越えて地下水について学べる教材を提供した。
- 地下水の文化や歴史を形に残し世代に渡って受け継げる資料を作成した。

絵本「思い出の湧き水」PDF ダウンロード

